

## 第20話 頼朝と義経の不和

敵の平家が亡ぶと、大功を建てた弟義経に対する兄頼朝の憎しみは俄かに露骨になって、ついに、義経は転々遁げ隠れ歩いた末に、自殺しなければならなくなる。

平家が亡ぶと、義経はその翌月の25日に京都に凱旋したが、兄の範頼は、その後も豊後に留まって九州を平定して、9月になって京都に還り、間もなく鎌倉に凱旋した。

## 頼朝、義経をにくむ

ところが、何という情けない事だったでしょう。義経が凱旋した時にはもう、頼朝は彼を憎んで、これを除くことを頻りに考えていたのです。しかし一体、兄弟の仲で、どうして斯ういう事になったのだろう？ 初め頼朝が兵を挙げた時に、義経が奥州から駆けつけると、「今日お前をみるのは、亡き父上にお目にかかるのと同じである」といって涙を流して喜んだほどの頼朝が、その後、義仲を討ち、平家を滅ぼすのに、殆ど身命をなげうって兄の為に尽して来た義経を、どうして憎むような事になったのか。

古語に、「狡兎死して走狗煮らる」という事がある。すばしこい兎が死ねば、もう猟犬はいらなくなるので煮て食われてしまうという意味です。敵国が亡べば孝臣が誅されるようになる事に譬えたので、義経の場合がちょうどそれに当たっています。

そもそも頼朝が義仲を討ち、平家を滅ぼすに当って、弟の範頼、義経の二人を自分の代官として差向けたことは前に述べた通りですが、実際の軍の上で、どちらに手柄があったかといえ、いうまでもなく義経です。範頼にも手柄はあったが、逆も義経に比べものにならない。実に、頼朝が鎌倉を一步も出ずして完全にその目的を達し得たのは、主として義経の手柄であるといっているのです。

## 頼朝の口実と梶原景時の讒言

然るに、頼朝は一の谷の戦いの後に、先づ義経を憎み始めて、壇ノ浦の戦いの後にはますますこれが甚だしくなった。そして、その理由としては、義経が頼朝の命令に従順に奉じないからだというのです。事実、義経にはそういう点もあるにはあったが、しかしこれは頼朝の口実であって、実は義経が京都で法皇のご信任を得ていることを頼朝が快く思わなかったところへ、逆櫓の論や先陣の争いなどで義経を怨んでいた梶原景時が、何かにつけて義経を悪くいって、しきりに頼朝の感情を煽り立てたのでした。

一の谷の戦いの後に、頼朝は朝廷にお願いして、妹の夫である藤原能保および一族の源氏を三人、それぞれ国司にして頂いた事があります。この時、範頼は三河守に任ぜられたが、義経に就いては、頼朝は何も申し上げなかったの、従って何の恩命にも預からなかった。けれども、義経に勲功のある事は法皇にもよくご存知でしたから、その後、60日ばかり経った時に、特に義経を左衛門少尉に任じ、檢非違使の役になされた。

しかし、源氏の武士は、すべて頼朝の支配の下にあるので、その推挙を経ずには朝廷の恩命も拝することは出来ない規定になっていました。それで、義経はその由を申し上げてご辞退したが、朝廷ではお聴しかなかったの、彼は終に辞退しきれずにお受けして、直ぐに使いを鎌倉に立ててその事情を報告した。ところが、頼朝はこれを聞くと以ての外の不機嫌で、自分が推挙しないのを不平に思っ、無理に所望したのに違いないと、義経の報告をまともに聞こうとはしなかった。けれどもこの時、平家は屋島にいたので、義経には大いに働かせなければならない用があったのです。

それで表立って何の処分もせずに置いたが、いよいよ壇ノ浦で平家が亡びてしまうと、もう全く用が無くなったので、頼朝はその不機嫌を露骨に義経に見せ始めたのでした。

義経は何も知らずに、意気揚々と京都に凱旋したところで、初めてこれを知って大いに驚きました。恐らくは、どうして兄の機嫌を損ねたかも分からなかっただろうが、ともかくも急いで使いを鎌倉に飛ばして、自分には決して二心のないという事を神に誓った起請文を差し出した。しかし、頼朝は取り上げようとしなかった。

### 義経の焦心

義経はその使いを出した後、これは親しく自分で会って一々申し開きをしたら、何でもなく兄の誤解が解けて、その機嫌が直るであろうと思った。使いの返事をも聞かないうちに、例の捕虜の宗盛父子を連れて京都を出発して、日数を経て相模の酒匂 - 小田原の東方 - に着くと、そこから使いを頼朝の許に出して、明日鎌倉に入る由を知らせた。

すると、頼朝は北條時政を酒匂までやって、宗盛父子を受け取らせ、別に小山朝光を使者として義経には、「鎌倉に入ることは相成らぬ。暫くその辺に逗留して何分の沙汰を待って居れ」という命令を伝えさせた。義経はどんなに驚いたであろう。久しぶりに兄に逢って、軍功を褒められ、心労をもらたわれ、兼ねてその誤解を解こうと思っていたのに、鎌倉に入ることも許されないというのです。それもこれも、憎むべき梶原の讒言の為かと思うと、義経は胸が煮え返るような気がした。

### 腰越状

何にしても兄の疑いを晴らさなければならないと、腰越まで行って、そこで空しく逗留しながら、数通の起請文を送って身の潔白を繰り返して繰り返して申し述べた。しかし、ついに何の返事も得られなかったの、最後に一通の書面を認めて、これを大江広元に送り、その取成しに依って頼朝の心を和らげようとした。これが有名な「腰越状」で、これには、

「ご代官の一人となって朝敵を平らげ、祖先の恥を雪いだから、お褒めに預かると思いのほか、人の讒言の為に却ってお叱りを蒙る。誠に残念な事だが、鎌倉にさえ入れて下さらないので、自分の本心を申し述べることが出来ない。この際、亡き父上でも生き返っておいででなければ、自分の悲しい気持ちを察してくれる者はないであろう。思えば、父上がお亡くなりになった時に、孤児となって、母の懐に抱かれて大和の国に赴いて以来、1日として安き心もなく、甲斐なき命をながらえながら、所

## 第20話 頼朝と義経の不和

しよほうぼう るろう かたいなか おんごく すみか  
々方々を流浪して、片田舎や遠国を住家としていた。

ようや ついとう ため さしつか が が がんせき むち  
漸く兄上にお目にかかれる機会が来て、平家追討の為に差遣わされ、ある時は蛾々たる巖石に馬に鞭  
う まんまん たいかい ふうは なん しの いきどお  
打ち、ある時は漫々たる大海に風波の難を凌いで、身を捨て、命の限り働いたのも、全く亡き父上の 憤  
やす たてまつ さいこう か のぞ たつ たちま  
りを休め 奉り、源氏再興の予ねての望みを達したいが為ばかりであった。 然るに、今、忽ち兄上の  
かんき こうむ なさけな  
ご勘気を蒙って、お目にもかかれないというのは、何という情無いことであろう。 既に諸神諸仏に誓  
なおも ゆる きでん こうだい じひ すが  
って数通の起請文をも差し上げましたが、猶以ってお赦しがない。 今はただ貴殿の広大な慈悲に縋って、  
よしつね たい まごころ なにとぞ とりな  
義経の他意なき真心を兄上に通じていただく外には道がないのである。 何卒、よろしきようにお取成し  
たの  
を頼む」

という意味の事が、こまごまと認められて、今もなおこれを読む者に涙を催さすほどのものです。 広元  
よりとも ひろう よりとも とりあ よしつね  
はこれを頼朝の前に披露したが、頼朝はそれを取合おうとはしなかった。 義経はついに全く失望して、  
さら まま むねもり  
更に命ぜられる俣に、また宗盛父子を連れて京都に向かい、既に前にも述べた通り、その途中で2人を斬  
って京都に帰った。

### 昌俊、義経を襲う

しかし、頼朝は義経をそのままにして置こうとはしなかった。 彼は間もなく土佐坊昌俊を京都に  
つか よしつね  
遣わして義経を殺させようとした。 義経は昌俊が京都に着いた事を聞くと、直ぐにそれを悟ったので、  
よしつね しょうしゆん さと  
昌俊を呼び出して、義経を殺しに来たのであろうと凶星を指して問い糺した。 しかし昌俊は、熊野  
しょうしゆん よしつね つぼし さ と ただ しょうしゆん くまの  
参詣に上って来たので、決してそんな事はないと、神々に誓った起請文を七枚も書いて、それを焼いてそ  
さんけい のぼ  
の灰を飲んだりした。

よしつね いつわ てだ  
義経はそれが偽りであるとは知っていたが、手出しをしないのに相手にはなれないと引き取らせると、  
しょうしゆん  
昌俊は、果たしてその夜半に六十余騎の武士を率いて六条堀河の義経の館に押寄せた。 この時、館  
には家来が僅かに七人しかいなかったが、よしつね さとうただのぶ  
義経は佐藤忠信らの勇士と共に、直ぐに門を開いて撃って出て、  
さんざんに敵を破ったので、しょうしゆん くらま かく  
昌俊は逃げて鞍馬の山中に匿れたのを、鞍馬山の法師らが捕らえて義経の  
もと よしつね しょうしゆん ちか そむ つみ せ き  
許へ送って来た。 義経は昌俊が誓いに背いた罪を責めて、六条河原でこれを斬った。

### 頼朝の本音

この事がやがて鎌倉に知れると、頼朝は、今こそ義経を討つべき理由のできたのを喜んで、自ら大  
ひき せめのぼ よりとも よりとも だれ  
軍を率いて京都に攻上ることにした。 この時、頼朝は「ああ九郎は頼朝の敵によくなった。 もう誰に  
えんりよ わな よしつね  
も遠慮はいらない」といって兵を出したと伝えられている。 いろいろに係蹄をかけて、無理に義経を引  
き落とした彼としては、恐らくはこれがその本音であったろう。

さすがのよしつね がまん でき かな た はんこう おも やさき  
義経も今は我慢が出来なくなって、叶わなくても起って反抗しようと思った矢先に、ちょう  
ど、そのころ京都の近辺にいた叔父の行家が、やはり頼朝の為に謂れもなく謀反人として討たれることにな  
ったのと出会ったので、ついに2人は一緒になって、いさぎよく頼朝と一戦を交えようという気になっ  
た。 しかしそれには院宣を賜って、頼朝を朝敵にして討とうと思ひ、後白河法皇にお願い申してその

ゆる  
お許しを得た。

ところが、その院宣を奉じて2人は近国の武士を集めようとして見たが、武士は一向に集まらなかった。既に頼朝の武威が天下を風靡していたからでもあろうが、1つはまた、これまでの例から推して、院宣とはいっても、果たして信用の措けるものかどうかを人々は疑ったからでもあったろう。

### よしつね ふうん 義経の不運

そのうちに、関東の大軍は既に京都に向ったという知らせが来た。義経と行家とは、このまま自分らが京都に居れば、当然また戦争のために法皇にもご迷惑をかけ、市中を騒がすことになると、一先づ九州に下る事にしようと、僅かの家来を連れて京都を出発して、今の大阪附近から船を出した。ところが、何という不運な事か、俄かに大風が起こって、主従の船を吹散らし、その多くは難破した。義経と行家とは、辛くも一艘の小船に乗って和泉の国に上陸すると、2人はここで別れて、おのおの行方を晦ました。

### おおえひろもと けんさく 大江広元の建策

頼朝はこれを聞くと、しきりに命令を下して義経らを探索させたが、容易にその行方が知れない。どうしたらよかろうかと思った時に、大江広元が一つの意見を出しました。

「今、天下は平定しましたが、まだ方々に悪者が潜んでいましょう。或いは、そういう者が義経公らをかかまっているかも知れません。それに、この先も、天下に謀反人が跡を絶つとは言いきれません。それらの者が乱を起こす度に、関東から兵を出してこれを鎮めるとすると、兵も疲れ、民も苦しみ、国の費えでもあります。いっその機会に、諸国に守護と地頭を置いて、悪者どもを取締りさせることにすれば、いながらにして天下を治めることが出来ましょう。この事を朝廷に申し上げて、お許しを受けると良いと思います」

というのです。頼朝はこれが名案なのを大いに喜び、早速、北條時政を京都にやっ、そのお許しを願った。

### しゅご ちとう 守護と地頭

これは後鳥羽天皇の文治元年(西暦1185年) - 平家が亡びた寿永4年と同じ年 - の11月のことで頼朝はお許しを受けると直ぐに部下の将士を守護、地頭に任じて全国に配置した。

守護は国に置かれて、従来の国司と並んで軍事と警察との事務を司り、乱を起こす者がある時には、自ら兵を率いてこれを征伐し、又、盗賊、人殺しなどを捕らえて、これを罰したりするものです。

地頭は官の土地にも私領の荘園にも一般に置かれて、一定の兵糧米を徴収するのをその務めとするものです。

いわば、全国に鎌倉の将士を置いて、見張りの網を張ったようなもので、頼朝に反抗しようとする者がいても、手も足も出せないのです。これが義経らを探索する上にも便利な方法でしたことは言うまでも無いが、それよりももっと大事な事は、これから次第に国司の権は守護に移り、荘園の領主は地頭

## 第20話 頼朝と義経の不和

にその実権を奪われることになって、朝廷の威光が自然に衰えて行ったことにあります。

### よしつね ゆくえ 義経の行方

さて義経らの行方に就いては、その後も何一つ突留めたことは無かったが、その年の末になって、やっと一つの手がかりがみついた。それは、義経が和泉から大和に入って、吉野山に匿れていたのを、吉野の僧兵らが知って、ある日、俄かに攻寄せ討とうとしたが、ついに取り逃がした事が分かったからです。かの佐藤忠信が唯一人踏み止まって、義経およびその家来を落とすとしたというのはこの時の事です。

鎌倉ではこれを聞くと、直ぐに人を遣って吉野の山中を隈なく搜索させたが、義経の行方はそれきりまた分からなかった。

### よしつね じんぼう 義経の人望

一体、義経はどこにいったのだろうか？ これは後で分かったことですが、彼は吉野から深い雪の中を大和の多武峯へ抜けて、大織冠鎌足の廟に祈りを籠めた後、その僧院の1つに暫く逗留していた。しかし、ここも人目につき易い虞れがあるので、間もなく、またこっそり十津川の山中に逃げ込んだ。そして、その翌年の4月頃には、窃かに京都に出て行家とも逢ったりしていたが、その5月に、行家が和泉の国で捕えられて殺されてからは、叡山や鞍馬山や奈良のあたりに転々として隠れ歩いていたらしいのです。

実に、よく関東の手が廻って、討ち取って手柄にしようという頼朝の家来どもがうようよしている中を、ついに捕らえられずに逃げおおせたところを見ても、いかに彼が世間の人望をあつめ、同情を得ていたかが分かる。いうまでもなく、彼の不運を憐れむ者が、頼朝の威勢をも恐れずにかくまってくれたのであります。

### よしつね おうしゅう くだ 義経、奥州へ下る

しかしそれが知れると、頼朝の搜索はますます厳しくなった。場合に依っては、数万の大軍を京都から押上せて、山々寺々を片っ端から搜索させようとまで言い出した。朝廷でもこれには困られて、検非違使の廳に命じて隈なく搜索させることにされた。ついに義経は従者と共に山伏の姿となり、妻子を連れて、北陸道から奥州へ下って再び藤原秀衡を頼った。秀衡は昔のように喜んで迎えて、衣川に新しい館を造ってここに住ませました。

### ひでひら 秀衡の死

これが鎌倉へ分かったのは翌文治3年の春の頃でした。頼朝は直ぐに使いを出して、義経を引渡すように命じたが、秀衡は従わずにいよいよ義経を大事に守っていた。所が、その年の10月、秀衡は病気に罹って、迎も治りそうにもなかったから、子の泰衡らを枕元に呼んで、自分の死んだ後は、義経公を主君と仰ぎ、そのお指図に従って国を治めるようにと遺言して、ついに死んだ。

### やすひら よりとも あつぱく 泰衡に対する頼朝の圧迫

## 第20話 頼朝と義経の不和

頼朝はその後もしばしば使いを出して、義経を引渡すようにと泰衡らに命じたが、泰衡は父の遺言を守ってそれに応じなかった。今度は後白河法皇にお願いして、義経を差出すようにという院宣を泰衡に下して頂いた。けれども、泰衡はその後も命令にも従おうとしなかった。すると頼朝は勅命を奉じない者は反逆人であるから、これは征伐しなければならないと、朝廷に追討の勅を下し賜るようにお願いすると共に、しきりに出征の準備を進めた。

泰衡はこれを聞くと、急に頼朝が恐ろしくなったのか、父秀衡の遺言に背いて、文治5年閏4月30日に、不意に兵を遣わして衣川の館を攻めさせた。

### 義経の自殺

義経はその武勇と機敏とを以ってすれば、討手を破ってこの場を遁れるくらいの事は勿論出来たであろうが、最後の頼りにしていた藤原氏にまで叛かれた上は、もはや生きても仕方ないと思ったのでしょう。家来に討手を防がせておいて、自分は仏間に入り、請われるままに、先づ妻(22才)と娘(4才)とを刺し殺してから、心静かに自殺した。時に年は31才でした。一の谷の戦いの時から常に義経の側を離れなかった鷲尾経春や、終始一貫、真心を尽して義経を守った武蔵坊弁慶は、この時勇ましく戦って討死しました。

### 義経に対する同情

ああ、なんという哀れな義経の最後であったろう。大功を立てて報いられないばかりでなく、日本国中に身を置く処すらなくなって、ついに奥州の果てまで行って、最愛の妻子をわが手にかけて殺した上で、自分も死ななければならない事になろうとは。この最後が餘りに哀れを極めたために、昔からいかに多くの方が彼に同情を寄せたかしれません。

彼がこの時衣川を遁れて北海道に渡り、更に満州に渡って、中国の清の皇室の先祖になったという言伝えなども、恐らくは此のまま彼を衣川で死なせてしまうには忍びないという気のした人々が、せめて物語の上でも生かして置こうかと思った心から作り上げた噂だったのでしょう。

### 義経の首

さて、義経の首が泰衡の許から鎌倉に送られると、頼朝は和田義盛と梶原景時の二人を首実検の役人として腰越までやってこれを受け取らせた。義経の首は黒塗りの櫃に入れられて、良い酒に浸してあったが、その変わり果てた姿を見ると、義盛ははらはらと涙を流して口をぎゅっと食いしばり、すがの景時も長く見つめることを為し得なかったということです。今、相模の藤沢に在る白幡明神は、義経の首を祀った所であります。

( 第20話 頼朝と義経の不和 終わり。次は前頁に戻り、第21話 武家政治の始めへ )